

明治二年（一八六九）刊「官許・官准」新聞・記事目録（一）

——『中外新聞』——

寺島 宏貴

一 はじめに

本誌前号で筆者は、明治二年（一八六九）に相次ぎ刊行された「官許・官准」新聞の発刊過程、並びに記事傾向の分析を行った。<sup>①</sup> 官許新聞は従来あまり重視されないメディアであり、官の規制を受けただけに未発達なジャーナリズムとされてきた。<sup>②</sup> しかし各紙の記事傾向は「権力―反権力」という基準で捉えられるものではなく、さらに記事内容も太政官政府からの布達のような国内政治に留まらず国際関係、戊辰内乱の戦況、社会、そして論説や詩歌の投稿と多岐に渉る。今回、この官許新聞の記事とその内容を一覽表にして紹介する。対象とするのは

旧徳川公儀の洋学研究機関に属した旧幕臣系知識人・柳河春三の編集による『中外新聞』である。

慶応四年（一八六八）六月に発刊停止に遭った『中外新聞』は、誌名に「官准」を冠して再刊した。それは実質、戊辰戦争に伴い慶応四年二月に発刊され、社会を感わしめた咎で発禁となった同新聞の後続紙である。しかし右の拙論で指摘したように『中外新聞』初めとする官許紙は記事形式をほとんど変えず発行を続けていた。

それを可能とした背景として、慶応四年八月の会津降伏と対外関係の安定（＝局外中立の解除）が、記事に対するある程度の許容範囲を生んだとみられる。また統治機構の様々な部局が新聞メディアを持ち、その活動を公にすることは近代国家としての体裁の意味合いもある。

官許新聞の記事的特徴として、①戦況報道等による徳川旧体制の「遺臣」の動向②郡県制論の展開による「開化」の主導<sup>(3)</sup>、そして③転載された建白書や論説の形式による「批評」の代理が挙げられる。新聞自身が直接論評するのではなく、記事形式によって「政法」への「批評」を行うのである。官許紙は旧徳川体制寄りの新聞紙として刊行されながら、同時にこの「批評」を通して読者を「開化」に導くという二つのヴェクトルを併せ持つ。それはまた、幕末以来の「公議・公論」の理念に、メディアアを通じもたらされた変容であった。編集人は慶応四年時の新聞紙とさして変わらず、「天下」という範囲からの政治参加―旧徳川体制の「遺臣」をその不可欠の構成要素とする「民情」―を求める「公議」を紙上に実践したのである。<sup>(4)</sup>

記事目録を作るということは、各紙の記事群を今後の研究資源としてデータ化し、新聞史（メディア史）研究その他の学問領域に資することを念頭に置くべきと思われる。<sup>(5)</sup> 本目録では記事見出し及び記事内容についておよびよその摘録は行ったが、しかし本格的な記事概要ではない分、利用の際には元の記事に当たることが望まれる。<sup>(6)</sup>

本目録にはなお見落とされた点や情報不足の箇所があるかも知れず、こうした点については読者からの批判を俟ちたい。学際のジャーナルである本誌に掲載することにより記事目録の意義が高まるよう願うものである。なお『中外新聞』以外の官許新聞紙の目録データについては後号に掲載する予定である。次に「凡例」として目録本文を解説する。

## 二 『中外新聞』記事目録・凡例

### (1) この目録について

本目録は、明治二年（一八六九）三月一七日から明治三年（一八七〇）二月一二日まで発行された『中外新聞』全四一号の記事を一覧表にしたものである。

### (2) 目録の各項目について

記事目録の作成に際しては次の各項目を設けている。

#### A. 号数

号数については基本的に『中外新聞』各号の第一丁表に記された数字を採録した。

B. 発行年月日

号数と同様に、『中外新聞』各号の第一丁表に書かれた発行年月日を探録した。

C. 記事見出し

記事の内、見出しの附されたものとそうでないものとが見受けられる。後者については記事内容から判断して見出しを付与した。その際見出しは「」で括っている。見出し中の数字については原文の通り漢数字を用いた。また（）内は当該記事の作者、（）内は割書またはルビを表す。

D. 記事・広告・刊記の内容

記事内容については主として翻訳記事・政府布達類の他（例えば『中外新聞』一号にある「英国ヘラルド新聞紙の抄訳」等）、見出しからでは内容を推測しえない記事（例えば「雑説」や「新報」、また「建白者氏名」+建白書」など一般的な見出しのもの）、また正誤記事に限り摘録を行った。これら以外の記事内容については左記の「」つき見出しに準ずるため「略」と記載した。刊記については巻末並びにその手前の丁に見出される場合が多く、これらを探録した。ただし刊記には毎号載るわ

けではない。なおその他の特記事項については例えば「地図あり」等とした。

### (3) 典拠としたデータ

記事目録の作成にあたり依拠した『中外新聞』は『明治文化全集第一八巻 新聞篇』（明治文化研究会編、日本評論社、一九九二）<sup>7)</sup> 並びに『日本初期新聞全集』（北根・鈴木監修、ペリかん社、一九八六～二〇〇〇）収載のものである。

### 【注】

- (1) 拙論「官許・官准」新聞の成立と機能―明治二年（一八六九）刊『中外新聞』を軸に―（『書物・出版と社会変容』九、二〇一〇）。
- (2) 春原昭彦『日本新聞通史』四訂版（新泉社、二〇〇三）、稲田雅洋『自由民権の文化史 新しい政治文化の誕生』（筑摩書房、二〇〇〇）など。研究史の詳細は註1拙論を参照のこと。
- (3) 同時代の「封建」「郡県」論の先行研究は前掲拙論に言及したものの、官許新聞の郡県論に触れた次の論考を見落としていたことをお断りする。

河原宏「郡県」観念と近代「中央」観の形成」日本政治学会編『近代日本政治における中央と地方（年報政治学一九八四）』岩波書店、一九八五。

(4) もっとも明治六年（一八七三）頃まではいわゆる「政論」が成立していないものの、「政論」化する前段階の状態を見る分には適しているように思われる。投書や論説というスタイルの定着過程を描くことで、初期新聞は演説や新聞という「ニューメディア」の叢生した民権運動の前身に定置することができるのではないか、ということである（先駆的著作として前掲稲田二〇〇〇がある）。この点については別稿を準備中。

(5) 余談ながら、主として個人単位で営まれる歴史研究（文献史学）によって得られたデータや知見を、研究資源として他の学問領域と共有する必要性を感じたのは、筆者が総合地球環境学研究所（京都市）大学共同利用機関法人・人間文化研究機構）のプロジェクトで参加した共同研究においてである。したがって個人による研究で成り立つ現状や、あるいはそうした史学の保守性の高さ、たかを、いかに評価するかが課題となるであろう。ただ諸学との協働には、社会科学的な「学説」・モデリングというよりも、むしろ経験科学的な意味で史学のあり方のキーがあるように思われる。ここでは、同時に史学にお

ける固有の「学説」＝時代像のブラッシュアップと公共化とが促されるかも知れない。

このような話に興味を持たれた向きは、拙稿「日本生態学会第五七回大会」参加記―「文理融合」を模索する―（『日本史研究』五二九、二〇一〇）を参照されたい。なお文献史学からの研究資源の提供による成果として筆者らは、寺島宏貴（東京大・総合文化）・柳澤誠（中央大・文）・小山泰弘・岡田充弘（長野県林業総合センター）・辻野亮・湯本貴和（地球研）「現長野県栄村で天保年間（一八三〇―一八四三）に発生したクスサン被害に関する古文書に見られた疑問点」（日本生態学会第五七回大会ポスター発表、<http://www.esj.ne.jp/meeting/absv/index.html>）として発表した。

(6) 官許新聞とその前身たる慶応四年時の新聞とを比較考量するには、新聞発行の時間的順序として、まず後者の記事目録化を行うべきであろう。ただし明治二年の官許新聞を優先的に目録化する要因として①これまでその存在があまり知られておらず、②さらにメディア史上の位置づけも得られていない状況、③内容的にみれば官許新聞の政治的機能（論説や投書をとという形式の媒介によるところのもの）が挙げられる。さらに、慶応四年時の新聞記事を目録化し、あるいは記事概要を作成することは①

全体的な記事量、すなわち旧徳川体制寄りあるいは反徳川の言説がいかなる広がりを持したか、②戊辰内乱の時間的経過に伴う記事・論調の質的变化を明らかにできることが期待される。

こうした問題の他にも『官板ビタビヤ新聞』（文久二〔一八六二〕）以来の初期新聞の記事について同様の課題が求められるであろうし、また土屋礼子氏の指摘や磯部敦氏の研究に見られるごとく地方新聞（地域メディア）の記述も検討課題であり続けている（土屋礼子「新聞史」『日本近現代史研究事典』東京堂出版、一九九・磯部敦『開化新聞』『石川新聞』の出版史的考察明治初期地方紙出版の一モデル』『書物・出版と社会変容』一、二〇〇六・同『開化新聞』『石川新聞』の足跡―明治初期石川県新聞事情研究のための基礎的考察』『中央大学国文』四九、二〇〇六など）。

(7) 『明治文化全集』は初版以降四度にわたって刊行・復刻されているが、「新聞篇」に関しては各版ともに大きな異同は見られない。同篇は新聞の影印版に比しても正確な翻刻が特徴といえる。『中外新聞』以外の官許新聞は「雑誌篇」の初版本に記載されている。なおこの点の詳細は後号に述べる。

#### 【附記】

本稿は、文部科学省科学研究費補助金・基盤研究（C）「『太政官日誌』を対象にした史料学の構築と戊辰戦争期の社会文化論に関する学際的研究」（藤實久美子研究代表）の交付を受けている。

明治2年(1869)刊『中外新聞』記事目録

号数	発行年月日	記事見出し	記事・広告・刊記の内容	
1	明治2 (1869)	3月7日	二月下旬御触書の写	新聞紙出版にあたり開成学校に願ひ出るよう触
			新聞紙印行条例	(略)
			[中外新聞序言]	(略)
			英国ロンドン新聞の抄訳	唐国政府、欧米へ特派全權公使送りし事
			三月六日横浜新聞紙へラルドの抄訳	リンカーンの政策と南北戦争、リンカーン寡婦の事、横浜ドル相場騰貴
2	明治2 (1869)	3月12日	会津遺臣の御所置	(略)
			横浜新聞紙の訳	近來のギリシャ・トルコ間戦争の事
			新聞紙出版願の案	(略)
			東京の素読指南手習師匠の人数	(略)
			外国人箱館より贈りし書状の訳	箱館戦況の報道
			新聞紙タイムスの訳	2月28日江戸湾にて蒸気船破裂、日本支那に在る英国兵隊総督病死につき代理指揮、ボンベイ大火事(ほか)
			新出書目	和蘭政典(神田孝平訳)、英国議事院談(福沢諭吉訳)、西洋旅案内外編(吉田賢甫著)、英吉利歩兵練法(上村又八訳)、柳河春三校刻)、新塾月誌(北門社蔵板)、痲瘡金針(杉田玄瑞訳)、養種説附通商雜誌
3	明治2 (1869)	3月16日	勅書の写	公議所開局の勅書
			[公議所に於て御下問、諸侯・上士の所置]	(略)
			[最近6ヶ年の糸と茶の輸出量]	(略)
			町触の写	名主一同廃止につき触
			横浜新聞紙の訳	唐国鉄道の事
			上海新聞の抄訳	唐国の特派公使続報
4	明治2 (1869)	3月22日	三月一三日行政官布告	待詔局開局につき布告
			[天皇、東京行幸へ出発]	(略)
			[公議所日誌出版につき重複記事は記載しない]	(略)
			[蒸気飛脚船到来]	蒸気船3艘横浜来着、友人箕作貞一郎も同船便にて兵庫より帰着
			[小学校取建て取調べ御用仰せ]	府県各処へ人材教育のため学校取建方取調仰出
			[薩長両藩に対し勤王の褒賞]	西京より薩長両藩へ勅使發遣
			[薩州にて版籍奉還を朝廷へ建言する由]	(略)
			[官兵七艘の軍船北方へ発向]	(略)
			新聞紙印行条例附録	(略)
			三月一三日横浜新聞紙へラルドの訳	箱館戦況の報道
			議院開局の日よめる歌	(略)
			照心鏡説(宇都宮義綱)	(略)
			[広告]	桂氏家方金龍丸
			[刊記]	売弘所 瀬戸物町 鳥屋左衛門 取次所 馬喰町四丁目 鳥屋六三郎
			[広告]	頼山陽書カ
			5	明治2 (1869)
[近日横浜輸出入品の景気]	(略)			
[出版広告]	西洋饅方(黒澤孫四郎)・外国錢講(柳河春三)・博物新編補遺(小畑篤次郎)			
外国新報	フランスで金銭新鑄、イスパニア女王は帰国能わずフランスに別邸設ける、ローマ教皇即位24周年(ほか)			
博物館の儀に付建白書(小臣植村千之助等)	(略)			
[東京への天皇再行幸を中止する議論]	(略)			
[出版広告]	公議所日誌			
[刊記]	明治二年官許刊行 柳河氏蔵版 發兌 東京本町四丁目 上州屋惣七			

6	明治2 (1869)	3月30日	〔横浜新聞タイムスの訳〕	去る19日フランス人2名日本人により襲撃され重傷
			三月一四日新潟からの新聞	新潟を越後府に改める噂
			郡県議(津田真一郎)	(略)
			御蔵俵 語臣蔵俵割	天皇・皇太子・太上天皇歳俵割 万石毎の語臣蔵俵割
7	明治2 (1869)	4月5日	〔天皇の鳳輦、東京城へ到着〕	(略)
			喜公議堂創建	(略)
			東京詞十首内録三(枕山大沼厚)	大沼枕山の歌三首
			三月二七日ヘラルドの訳	箱館戦況の報道
			イギリス女王誕生日の事	(略)
			〔横浜滞在の外国人タイヒュス熱病〕	(略)
			船軍記聞の補	箱館戦況の報道
			少年は学を怠らざるべからざるの諭言(斯波平蔵)	(略)
			〔出版広告〕	官板議案録・蘭学事始
8	明治2 (1869)	4月11日	四月六日南部藩よりの御届書	降伏の賊兵5名青森へ護送
			余考〔四月二日横浜新聞紙の抄訳〕	阿州の船戌辰丸の由来ほか(全文は第7号と同じ、また遠近新聞第5号掲載との但書あり)
			雑説	怪我せし英人メケンジー快復し横浜へ出立、日本橋外所へ偽の行政官布告書張出、タイム스에公議所法則案英訳して出せり
			〔英公使パークス遭難風聞〕	(略)
			ガセット新聞の抄訳	芝居見物の欧米人日本人を追払う由
			四月六日ガセットの訳	青森港より到着せし船の戦況報告
			同七日出版新聞紙の訳	官軍船仙台へ出立
9	明治2 (1869)	4月16日	〔旧幕府にて雇用したフランス陸軍教師へ当分暇〕	(略)
			薩藩御届書并に降人姓名書	(略)
			御布告書の写	外国へ銅輸出につき
			外国人横浜にて女子を打擲の一件	(略)
			四月八日出版横浜新聞紙の訳	ニューヨーク号にて九鬼長門守ら日本人400人來着、唐国茶価下値、アメリカ大統領グラントがキューバ独立承認ほか
			兵庫新聞の抄訳 〔和泉橋医学所での腑分け〕	パークス遭難、神戸居留地事件ほか (略)
10	明治2 (1869)	4月20日	郡県議(昌平学校寄宿生 五島・松尾龍藏、薩州・島津帯刀久馨→知学事山内公、判学事秋月公)	(略)
			英漢新聞紙の訳原本ロンドン刊行三百十一号	ナポレオン生誕百年でフランス皇帝父子コロンカ島旅行、イタリア国内で政府を廃し合衆政治目論む
			兵庫新聞の訳 第九号の続き	神戸居留地にて会社設置のため外国人商議、居留地内開店願が急増、金札相場ほか
			〔出版広告〕	掌中万国一覽、西洋時計便覧、朋百〔ボンベ〕氏業論
11	明治2 (1869)	4月26日	〔外国人への粗暴の所行の者これあるにつき心得違い無きよう布告あり〕	(布告文なし)
			駿州沼津医局の告示	治療希望の者に告示
			第九号横浜本村清次郎妹の一件の続	日本人女子打擲一件
			〔加茂社祭祭執行につき御遙拜の儀式〕	(略)
			〔学校官副知事、制度寮選修の選任等人事〕	(略)
			〔駿藩前島來助、出雲藩飯塚修平建白書〕	漢学を廃し国文を定める事(要点のみ)
12	明治2 (1869)	5月2日	箱館の新報告	箱館戦況の報道
			珍しき裁判の話 外国新聞抄出	アメリカ東岸イギリス領での裁判
			四月廿五日出版新聞紙の訳	箱館戦況の報道
			過三厄利那(サン・ヘレナ)島拿破崙(ナポレオン)帝墓(伝櫻本武揚作)	(略)
13	明治2 (1869)	5月5日	唐国諸港税銀并に阿片烟の事	(略)
			アメリカの雑事	ニューヨーク新聞紙局の話、畿那という樹皮(キニーネ)の効用、北アメリカ治平後に物産開く事ほか

			論進士及第議(佐倉議員依田右衛門二郎)	人材登用法につき建言(公議所議案の全文。公議所日誌のものは大略のみとしている)
			外国新聞の訳	イスパニアの軍船キューバに発向、英国太子アテネへ到着、フランス―ベルギー間鉄道熟談に至らざる事ほか
			一一号転任の補 〔出版広告〕	11号掲載政府内人事の続き 化学提綱(宇都宮鑑之進の訳)
14	明治2 (1869)	5月11日	暑中養生方心得の事 〔寺島陶蔵會計官に任ず〕 〔飛騨一揆の報〕 〔イタリア人、養蚕の視察と種紙の買付に上州へ〕 〔イタリアは蚕の病流行で生糸出来高が激減〕 〔出版広告〕 出版条例〔付・附録〕	(略) (略) (略) (略) (略) 英政如何(鈴木唯一)、泰西商會法則(神田孝平) (略)
15	明治2 (1869)	5月15日	出版条例の続き 香港新聞紙抄出 印度人の話 同 蛇の怨念祟りを成す話 幼院取建の儀に付奉願候書付写(百姓 重右衛門) 郡県論(細川潤次郎) 新報	(略) インドの習わしである齋歿蟲魚崇拜のおかしき話 蛇酒の祟り (略) (略) 先日盛岡にて脱走兵に加わりし外国人は一応吟味
16	明治2 (1869)	5月19日	箱館新報(ヘラルドの訳) ハイヨウ丸破船の事(別段新聞の訳) 正誤 〔横浜港碇泊の外国船〕 〔在留軍船〕 〔大阪にて化学・理学の稽古場普請中〕 〔モンブラン、横浜に到着〕 紀州侯上書の写 郡県論之二 第一五号の続き 〔昨日、箱館の様子とブリュネ等の一件につき詳しい一通を得た〕	箱館戦況の報道 (略) 第4号4枚目の正誤 (略) (略) (略) (略) 版籍奉還につき上書 (略) 箱館戦況の報道
17	明治2 (1869)	5月25日	金札議(細川潤次郎) 外国新報 横浜新聞の抄訳 〔制度寮廢止〕 南アメリカ大地震の事 〔開成学校の付属地雑司ヶ谷にて物産方草木培養の用に備う〕	(略) アメリカにて北方ロシア領25000方里買入、オランダのコンシュルゼネラル・ホルスブルック氏婦国、英国にてカナダ地方に年少女子を移し人種化する計画ほか 英米間でアラバマ船一件の交渉、清国使節在仏中、箱館戦況ほか (略) (略) (略)
18	明治2 (1869)	5月28日	孝子利兵衛伝 佐倉藩士長谷川高経選 箱館戦争の事 郡県論之三 其四	下総国印旛郡長熊村農の孝子利兵衛の話 (略) (略) (略)
19	明治2 (1869)	6月5日	〔天皇の東京行幸中のエピソード〕 郡県論(水谷悦) 外国新報 蝦夷地産物考略(柳河春三) 追加新報	(略) (略) イスパニア兵とキューバ兵戦闘、英仏会盟してイスパニアを助ける由、ペーリュー国より鉄船によりキューバ援軍、北米よりイギリスへの電機報告定価 (略) 箱館戦況の報道
20	明治2 (1869)	6月15日	横浜新聞の抄訳 箱館記聞 松本藩内山総之助建白書の写 日尾氏女直子の文章一則 新出書目	イギリス王子不日來着の旨、英国コンシュル病死、5月24日品川通行中の馬車に斬り掛んとする武士 箱館戦況の報道 穢多非人の名号御廢しの事 洋夷の兵器等私に買う事と平時洋服を禁ずる事ほか 洋兵明鑑、英国軍艦刑法、旗章説略、ピネロ氏英文典(以上、慶應義塾蔵版)、化学入門外編(桂川甫策、石橋八郎訳)



21	明治2 (1869)	6月19日	建白書の写(三輪田綱一郎、伊藤龍馬、檜垣孝一郎)	版籍奉還、郡県制につき建白書
			六月中旬御布告の写二通	公卿諸侯の称庵す旨
			[彈正台設置の申達] [上野山下の辺の空虚なる番所を通行せし人の話]	(略) (略)
22	明治2 (1869)	6月29日	[大中小藩の藩主を藩知事に任命]	(略)
			川渡船の事	治水の方を設置せられん事につき建白少なからず
			小便をこらへ居るまじき戒	(略)
			七月朔日日蝕の事 横浜新聞の訳	7月1日朝日食の事、但し欠始めは日出前ゆえ見えず
			上海新聞の抄録	諸国の女人衣裳の風俗につき
			外国新聞の訳	ロシアにて遷都評議、スズエ運河切り開きの落成近づきエジプト国王欧州諸国へ助力乞う、キューバー揆未だ鎮静せず、ハイチ一揆、ペネズエラ政府役人運上を食り取る事ほか
			[横浜ドル相場騰貴]	(略)
[九段にて靈魂祭]	(略)			
[広告]	米相国文天祥書 正気歌			
23	明治2 (1869)	7月9日	[諸州知藩事帰国の暇仰出]	(略)
			[大阪にて化学の稽古場出来]	(略)
			[一諸侯より弁事へ伺書]	料理屋での酒食や歌妓、邸内への歌妓呼び寄せ、また遊里へ参ることは苦しからず候哉
			仏蘭西の一揆国帝の一言にて平定せし事	(略)
			[出版広告]	格物入門和解、英国刑典
			世界第一長寿の事	(略)
			おほかみとひとつじのたとへのこと	権柄ばかりをもちゆる愚(1592年西洋字を以て日本文を書きたる本の権奥)
24	明治2 (1869)	7月20日	[職員令制定]	(略)
			[公議所を集議院と改称]	(略)
			[浜御殿を英國王子の旅館へと修復、延遠館と称す]	(略)
			[銭相場金一両につき十貫文と定むべき旨御布告]	(略)
			横浜病院の記	1869年上半年の病人内訳
			日本人アメリカに移住の事	会津人ブラセルフィールを去ること四里半の処に植民(カリホルニア新聞紙に出づ)
			横浜新聞の誤を弁正す	7月5日ガゼット紙掲載3か条(薩摩人駿川清見寺襲撃、脱走兵備前岡山着岸、薩摩と細川不日戦争)は実説に非ず
東京より横浜への飛脚船	東京—横浜間を毎日二度ずつ往返(オイト兄弟広告)			
25	明治2 (1869)	7月24日	七月一三日大風の記	全国的な大荒れ、在留外国船破損
			神戸の風聞	神戸の米人殺害事件につき風聞
			駿南竹枝十首内録四(堂堂居士)	(略)
			[出版広告]	イギリス施条砲・野戦用砲新式(内田弥太郎訳)
			英吉利人日本にテレグラフを用ひんとする事	英国~デンマーク~清国、日本を電信機で結ぶ目論見
			陶器(セトモ)に着色(サイシキ)を施すの新法	(略)
			[蝦夷地の通称田代国と改称のよし] [英国王子来日]	(略) (略)
[広告]	西洋舶来酒類・菓子類(浅草森田町・鳥屋新右衛門)			
26	明治2 (1869)	7月29日	横浜新聞の訳	[或る貴僧より日本政府への建白書](耶蘇教永世嚴禁の旨)
			佐倉藩徒刑之事	同藩徒刑法を立て朝廷へ伺い申すに決す
			[第24号正誤]	(略)
			英国王子参朝	(略)
			[兵庫新聞に湊川で日本人による外国人殺害事件を記せり]	(略)
			[梅毒の恥を知り生を軽んずと雖も君の為に命を擲つ忠臣]	(略)
			英学教諭所の引札	阿波屋次郎吉による英学教諭所開校
[刊記]	明治二年官許刊行 柳河氏蔵版 発兌 東京本町四丁目 上州屋惣七			
27	明治2 (1869)	8月6日	[ヨーロッパ~アジア間、横浜—サンフランシスコ間、ニューヨーク~ヨーロッパ間船路]	(地図あり)
			天下形勢の変革を論ず(青眼外史)	(略)
			[出版広告]	官板経済原論、交易問答、西洋全史要要、明治改正万国輿地分図
			[大学校の神祭記事]	(略)
			[京都兵学校の大阪移転]	(略)

28	明治2 (1869)	8月16日	外国船雇入の儀に付御布告書	(略)
			[隠岐県廃止して石見国大森県を設置。その他の廃県令]	(略)
			曆法議案(市川齋宮)	(略)
			横浜新聞の訳	英国王子去る3日東京より横浜に来着す
			[榎本武揚、大鳥圭介を寛典に処す]	(略)
			[医師松平良順は静岡藩邸内にて謹慎]	(略)
新出書目	英国歩兵操練図解・小隊部(林百郎撰)、仏蘭西輕歩兵程式(田邊良輔藏版)、英国商法(福地源一郎訳)			
29	明治2 (1869)	8月26日	[蝦夷地を北海道と改称する布告]	(略)
			孝子の褒賞	神田相生町彦太郎、養父召捕の際身代り嘆願につき褒賞
			官祿御定則の事	此度の官位職制、並びに春蔵省より出る官祿定則
			紀州産石炭鑑定の説(瑞穂屋久三郎)	(略)
			近刻書目	官板和蘭学則(内田正雄訳)、奇機新話(麻生弼吉訳)、兵学提要、雷砲射撃表
[英国使臣パークス襲撃、浪人一名取押え]				
30	明治2 (1869)	9月2日	[松平慶永民部卿、大学校別当兼侍読へ転任]	(略)
			信州上田騒動の事	(略)
			[静岡藩移住の士に分与せらるる祿佐]	(略)
			外国新報	唐国猛暑と風雨ありて米価騰貴、スネルが日本人をカリフォルニアに開発のため移住させる、肥後侯より英国へ注文のコレット船出来ほか
			[皇后、東京行啓]	(略)
			詔書の写	朕海内多難に付き躬ら節儉以て救恤に充んとす
			輔相 三条公より御達の写	救荒の詔出て官祿五分の一返納する旨達
			日記の抄録(少博士春蔭)	8月29日大学校別当松平春蔵閣成学校へ入来ほか
			[出版広告]	頭書画入世界図書(慶應義塾藏版)、西洋雑誌・卷六より(開物社藏版)
31	明治2 (1869)	9月6日	貧院取建方の儀に付建白書(大聖寺藩・山田来相郎)	(略)
			外国新聞	トルコ・エジプト間対立は退々和平、プロイセン・フランス間戦争の報は浮説、清国・アメリカ間に条約締結ほか
			横浜新聞	5月25日～9月5日までの輸出高、9月5日頃の砂糖と米の大相場
32	明治2 (1869)	9月17日	[伊勢内外宮御遷座御祭礼無滞相済たる由]	(略)
			[芝神明社御遷座]	(略)
			[天皇、近日中に横須賀製鉄所を觀覽]	(略)
			[イギリス王子、北京に到着]	(略)
			再起金龍山机塚募疏	(江戸貧士桜痴泥隠福地万世尚氏選併書)
			美濃国にて一揆を平定せし事	(略)
			鹿兒島藩の願書	旧幕府の大罪につき情状を陳述し天裁を仰ぐ外これなく評議ありたき旨願書の雛型
			[オーストリア公使と外務省官員、通信条約締結につき応接]	(略)
			アメリカ鉄道の記事	(略)
			[蒸気飛脚船「シテイ、オブ、エド」出帆時刻]	(略)
33	明治2 (1869)	9月28日	[天皇、集議院に行幸]	(略)
			静岡藩への御達	徳川慶喜へ宥慮を以て謹慎免ぜらるる事
			鶴田藩(元石州浜田今改めて鶴田と称す)への御達	本祿不足高御蔵米を以て藩祿下賜
			火山鳴動の事	信州浅間山の烟々々より多く山鳴聞こゆる由
			第一一号前島・飯塚二子建白書の評	(略)
			第二一号の正誤	(略)
			鹿兒島藩賞典を辞する上表の写	(略)
			外国新聞	デンマーク世子とスウェーデン王女婚姻相整ひたり
			[出版広告]	官板集議院日誌
34	明治2 (1869)	10月10日	三三号の続き 鹿兒島藩の再願書	(略)
			東京雜詞文十首の内録五(枕山老人)	大沼枕山の歌五首
			太政官御布告の写四通	大宮県を浦和県と改称、民部省通商司にて金札至急製造、東京中非人取調壯健の者旧里引渡(以上9月付)、官位相当表の通り官祿を立つる(10月付)
			第一九号に出たる産物考略の続き	(略)
			[英仏読書通弁稽古、於浅草]	(略)

35	明治2 (1869)	10月19日	大政復古有功の賞典を行わせられし事	三条実美・岩倉具視以下賞典書上
			カラフトよりの書翰の写	樺太にてロシア艦一隻來着、我国詰合役人の応接を待たず暴行し追々上陸
			貧民救方の儀(和歌山藩 三毛梯二郎)	(略)
			己巳九月民部省御布告新定税則	(略)
			御布告の写	西洋型の帆船・蒸気船自今百姓町人に至るまで所持差許
			[中宮、東京へ到着]	(略)
			太政官御布告の写	今般新銅錢鑄造するも北海道開拓のため鑄造増
正誤	第34号の正誤			
[出版広告]	英学入門(石川長次郎)、堡塞新論二編(同)			
36	明治2 (1869)	11月8日	[宮中にてテレグラフ観覧]	(略)
			外国新聞	天津条約改正のためオールロッキ上海來着ほか
			岡松大助教手記の写	戊辰7月に小笠原大監に従い長崎に役せし折の手記
			英吉利大字典を刻する布告(北門社長山東一郎)	(略)
			外国新聞の訳	オーストリア帝領地一揆平定のためスエズ運河見物より帰国、清国の商人ロンドンに通商せんとす、世界に珍しき短人「トムソン」近日横浜來着ほか
37	明治2 (1869)	11月20日	三十五号の正誤	(略)
			医道の事に付建白書写(権田直助・井上頼国・松田木生)	(略)
			[大村兵部大輔死去]	(略)
			[東京医学校医師「ウイリス」薩州出向すれど代用医師定まらず]	(略)
			唐国新聞	唐国諸港の役人汚職と唐人等による英人への打擲を糾さんが為オールロッキ來清
			外国雑報	フランス帝ナポレオン危篤より快気す、イスパニア王位定まらず、英国商船台湾島にて難風に遭遇
			アメリカ人「メランコリー」を治する薬方 新式打方蒸気船「シチナイ、オブ、エド	(略) (新型蒸気船「シチナイ・オブ・エド」出帆の広告)
38	明治2 (1869)	12月7日	唐国の曆并一二月晦日日食の事	(略)
			[出版広告]	皇国明治三年官板中外通曆
			御賞典の事	御太政御維新以來功臣に御恩賞(徳大寺実則、副島種臣、大隈重信ら)
			横浜新聞の抄訳	「サンドウイス」島へ赴く使臣上田氏らサンフランシスコに到着、日本の一貴族「サダハラ」公ニューヨークへ旅行、スエズ運河航行盛ん、居留地廿番殺人罪人召捕ほか
			[英国医師ウイリス薩摩へ行く代りに亜国医師レモンス赴任]	(略)
			[今冬は寒威厳しく、寒暖計は21度まで下がる]	(略)
			天長節賜御酒於議員恭賦謝恩・己巳九月廿七日上幸於集議院恭賦以紀盛事	集議院に臨幸に際し神戸・長尾・土浦ほか各藩集議院議員による謝恩
			東京詞(原三十)(大沼厚枕山)	大沼枕山の歌二首
39	明治3 (1870)	1月12日	[明治二年の回顧]	箱館平定・海内静謐は目出度き例、吉田鉄橋の落成・築地電信機も昭代の盛事
			鹿兒島藩にて国中の医師へ諭告の文	吾藩に英医ウイリス氏招聘にあたり漢土古今の医書に代わり西洋医著書を取るべき旨の諭告
			[大学南校にて日耳曼学の稽古始まる]	(略)
			[出版広告]	海軍沿革論
40	明治3 (1870)	1月26日	英国公使の書翰并に本国宰相書翰の訳	(英国特派全權公使パークス→澤・寺島外務卿)英国王子日本訪問時につき英国女王・政府より謝辞の旨
			曆道の儀に付建白書写(倉橋従三位)	(略)
			水戸藩知事へ被仰出の書面写二通	従二位大納言光圀・同斉昭に従二位宣下
			[万里小路邸へ千葉道三郎・定吉の女弟子を招き難刀仕合]	(略)
41	明治3 (1870)	2月12日	[仁和寺宮、東伏見宮に改称]	(略)
			長州動乱の一条	奇兵隊なるもの国内要所に開門を設け百姓一揆を催せし
			山口藩よりの伺書	去冬兵制改革一条より沸騰せし隊卒へ臨機に取計うにつき伺
			議院考一則(唐華陽)	(略)
			新出書目	電銃操法(福沢諭吉訳)、西洋料理通、万国故事説、英吉利局方、開物新書二集(雀叢論)、同三集(洋酒説)
[広告]	中外屋、紀伊国屋源兵衛の書肆開店			